

宗教儀礼に見る仙薬としての茶——「称名寺聖教」を中心に——

実践女子大学・文芸資料研究所客員研究員 張 名揚

日本の喫茶文化というと、「茶禅一味」という言葉や、茶を将来したとされる臨済宗の明庵栄西（1141～1215）などを思い浮かべる人もいるだろう。そうした発想の背景には、茶と禅は強い結びつきがあるものという通念がある。しかし、これは正鵠を射た理解とは言い難い。

そもそも、栄西が茶を将来したとされていることには、再考の余地がある。栄西が撰述した『喫茶養生記』は日本における最古の茶の専門書として知られているが、その序文には「我が朝日本、昔より之（茶）を嗜愛す」とあることから、上代にはすでに喫茶の風習があったことがわかる。また、本書の下巻には「喫茶法」という項目が設けられ、そこには「此の茶、諸天嗜愛す。仍りて天等に供する時に茶を献ず。茶を供せざれば則ち其の法、成就せず」、「貴きかな、茶。上は神靈諸天の境界に通ず」と見えており、当時の日本では茶を供物として利用していたとみられる。

また、『喫茶養生記』には禅に関係する記述が一切見当たらないのに対して、複数の密教文献が引用されている。これより、本書は密教思想を踏まえて撰述されたものであり、ここに見える供物としての茶も、密教儀礼と深い関係があると推察される。事実、中世日本の密教では茶を供物として利用していた。神奈川県称名寺（真言律宗）所蔵「称名寺聖教」によれば、茶を供物とする修法の多くは中国から伝来したとされる儀礼であり、それは密教では「天」の類に位置付けられる星宿を供養するものである。たとえば、同寺所蔵「順忍書状」紙背「題未詳聖教」と「秘鈔口決 本抄第十八卷」の記述によれば、茶は「仙人」の嗜む仙薬であるため、この仙薬を「大仙」・「天仙」と称される星宿に捧げると記載されている。

加えて「称名寺聖教」からは、茶を捧げる際の作法も垣間見ることができる。「称名寺聖教」では茶を入れる容器を「白瓷」と指定しており、この「白瓷」は「シラシ」と称され、日本の国産品と推定されている。宋代以前の中国喫茶文化と深く関わる点で注目に値するものであり、今後検討を進めていきたいと考えている。

このように、茶を供物として星宿（「天」）に捧げることは、中世日本においてはごく一般的に行われていたようである。そして、これは『喫茶養生記』に見える「天等に供する時に茶を献ず」という記述と共通しているため、喫茶文化史のみならず、『喫茶養生記』の宗教思想史における位置づけについても改めて考察していかねばならない。